

学位論文審査報告書

氏名 : Shantu Barua シヤントウ・バルア
学位の種類 : 博士 (文学)
論文題目 : Neo-Buddhists in Bangladesh: A Study on the Oraon Tribal Community,
its Socio-Religious and Popular Culture
「バングラデシュにおけるネオ・ブディスト (改宗新仏教徒)
ーオラオン部族コミュニティの社会宗教的民間文化の研究ー」

I. 前言

シヤントウ・バルア氏はバングラデシュ南東部チッタゴンの出身で、2007年ダッカ大学人文学部パーリ学仏教学科卒業後ただちに同大学院修士課程に進学、2008年に同課程を修了し、2010年より同大学専任講師の職にある。

氏のバルアという姓は同時に部族名である。バルア族はバングラデシュからインド東部に至る広汎な地域に居住し伝統的に上座部仏教を奉じてきた民族で、イスラーム教徒が圧倒的多数を占めるバングラデシュにあつては典型的なマイノリティであり、彼らにとって仏教は民族的アイデンティティの拠りどころでもある。こうした環境の中で成長した氏は年少時より仏教学を志し、一貫してパーリ聖典を中心とした南方上座部仏教の教義を研究すると共に、同国の仏教徒コミュニティの社会的文化的存在様態にも深い関心を抱き、バルア族以外の少数民族仏教徒を対象としたフィールド調査にも従事している。

2013年4月に本学大学院文学研究科仏教学専攻博士後期課程に入学、以後精力的に研究を進めて来た。氏の研究課題は本学位論文の表題に示されるとおりであり、具体的には以下の三方面から遂行された。

1. 関連文献と歴史的考古学的記録の収集および検討
2. 部族の儀礼や祭事への参加および聞き取り調査等のフィールドワーク
3. データの整理・分析および関連諸領域専門研究者との討議

氏は本学を拠点に内外の研究者との交流を通じて研鑽を積むと共に、夏期休暇と冬期休暇を利用して各年2度に亘る本国バングラデシュおよびインド・西ベンガル州でのフィールドワークを実施してきた。昨2014年度は学位論文提出のための所定の手続きとして「博士論文研究計画書」を提出、それにもとづいた「博士論文提出資格試験」を受験し、通過した(2015年1月22日付)。2015年7月末に学位論文を提出、同9月9日の文学研究科委員会にて論文受理と審査委員会の構成が審議承認され、12月21日に審査委員会による公開口述試問を実施した。

この間、バルア氏は2013年12月に京都仏教クラブ(会長:清水寺貫主・森清範師)より、仏教を研究するアジア諸国からの留学生のための「第6回仏教クラブ奨学金」を授与された。また、2014年には中村元東方研究所(理事長:東京大学名誉教授・前田専學博士)の募集する「アジア諸国海外研究・調査助成」に応募して採択され、その助成金によってバングラデシュでのフィールドワークを実施し、成果を東方学院・酬仏恩講合同講演会(11

月 29 日於薬師寺)にて口頭発表した。その内容は論文として同研究所機関誌『東方』第 30 号に掲載された。その他、パーリ学仏教文化学会、日本印度学仏教学会などの関連全国学会で積極的に発表を行っている。

バルア氏がこの度提出した学位請求論文“Neo-Buddhists in Bangladesh: A Study on the Oraon Tribal Community, its Socio-Religious and Popular Culture”（「バングラデシュにおけるネオ・ブディスト（改宗新仏教徒）—オラオン部族コミュニティの社会宗教的民間文化の研究—」）（A 4 版、xii 頁+本論 222 頁+Appendix 25 頁、総語数 66,050 words、その他図版・写真多数）は、インド東部からバングラデシュに至る広汎な地域に居住するオラオン族について、その民族的出自・人種、言語、社会構成、分布、生活様式の全般を概観した後に、誕生儀礼、婚姻儀礼、葬送儀礼、季節毎の各種儀礼、特にユニークな豊穡儀礼（カーラム祭）、彼らの仏教改宗に伴う仏教的諸儀礼、という順で詳細な事例研究を進め、最後に一連の研究を総括している。更に、補遺として、バングラデシュ国内にあるオラオン族の仏教寺院に関する情報を網羅した寺院総覧を付している。

オラオン族の文化的諸相、特にその宗教生活について、先行する関連研究文献の徹底的な精査と分析に加え、長期に亘る再三の現地フィールド調査の成果を盛り込んだもので、この分野に於いて今まで類例のない意欲的な研究である。

II. 目次

Acknowledgement 謝辞

Introduction 序

Chapter I: An Introduction to Oraons 第 I 章 オラオン族概観

Chapter II: Notions and Rituals Concerning Birth 第 II 章 誕生に関する観念と儀礼

Chapter III: Rites and Rituals Regarding Marriage 第 III 章 結婚に関する祭祀と儀礼

Chapter IV: Rites and Rituals Regarding Death 第 IV 章 死に関する祭祀と儀礼

Chapter V: Social Rituals and Festivals 第 V 章 社会的儀礼および祭礼

Chapter VI: Raji Karam Parav: A Popular Festival 第 VI 章 ラージ・カーラム・パラボ—民間祭礼—

Chapter VII: Buddhist Religious Rituals and Ceremonies 第 VII 章 仏教的宗教儀礼および式典

General Conclusion 総結

Appendix 補遺（バングラデシュ北部仏教寺院総覧）

Bibliography 文献目録

III. 論文の要旨

1. 研究テーマ (Research Theme) :

「バングラデシュにおけるネオ・ブディスト（改宗新仏教徒）—オラオン部族コミュニティの社会宗教的民間文化の研究—」（“Neo-Buddhists in Bangladesh: A Study on the Oraon Tribal Community, its Socio-Religious and Popular Culture”）

2. 研究計画 (Research Proposal)

バングラデシュは、イスラームが支配的な勢力ではあるものの、他にヒンドゥー、仏教、キリスト教そして各種の自然崇拝が混在する多文化・多宗教の国である。バングラデシュの仏教徒コミュニティは様々な民族集団からなる。主なものはチャクマ、タンチャンギヤ、チャク、ムル、マルマ、ラカイン、ケヤン、バルア、そしてオラオンであり、各地に分散しているが、その全てが現在は上座仏教を奉じている。彼らの言語、文字、服装、食、生活様式そして民間信仰と文化は互いに相違している。歴史的証拠は仏教がこの地域に最初期から導入されていたことを示唆しており、7世紀から12世紀にかけては多くの仏教王朝に庇護されて国家宗教の地位を享受していた。結果的に、仏教はバングラデシュの国民文化を豊かにする極めて重要な役割を果たした。とりわけ上記の盛期には密教がバングラデシュの宗教的側面において中心的地位を占めた。更に、バングラデシュの人々は各自が固有の宗教的儀礼や祭祀をもっていると同時に、多彩な共通の民衆文化を分有している。12世紀以降は、種々の不利な社会政治的展開により、仏教はその栄光を失い少数派の宗教へ転落した。仏教の衰退と共に、多くの仏教徒少数民族集団はその宗教的アイデンティティを喪失し、自然崇拝や習合的な民間信仰を<先住民> (アーディヴァーシ *Adivasi*) というアイデンティティと共に受容することとなったのである。

仏教に帰依したオラオン族の主張するところでは、彼らはそうした集団の一つであり、祖先は現バングラデシュの本来の居住者にして密教の信奉者であったという。他の先住民集団と同様に、彼らは曾ての仏教的儀礼・祭祀を忘れ、下層ヒンドゥーとして極めて習合的な民間文化に従うようになっていた。しかしながら、本世紀に入り多くのオラオンが上座仏教に改宗した。とはいえ、彼らの民間文化には仏教的倫理に反する点もある。

本論文においては、彼らの主張を検討し、バングラデシュ国内のオラオン仏教徒の社会宗教的民間文化を探求する。更に、オラオン自らがこうした実践を通じて表出している諸観念を分析する。加えて、オラオン文化の特徴を歴史的背景とともに考察し、彼らとその固有の社会民間文化のおかげで別個のコミュニティとして生存し得ていることを論じる。最後に、彼らの思考方法をバングラデシュ仏教徒コミュニティに属する他の様々な民族集団から区別している諸要素について考察する。

3. 研究の目的 (Objective of the Research)

本論文の主たる目的は、特にバングラデシュの少数先住民民族集団たるオラオンの社会宗教的民間文化の探求を通じて、南アジアにおける仏教および仏教文化に関する人類学的知見に寄与することである。バングラデシュのオラオンの人類学的なアイデンティティと社会宗教的民間文化が本論の焦点となる。

4. 研究の重要性 (Importance of the Research)

バングラデシュの仏教は、イスラームが支配的ではあるが多文化的多宗教的な国において、何世紀にも亘り生き延びてきた少数派の宗教を代表するものであるが故に、とりわけ興味深い。また、バングラデシュはインド亜大陸の中に存在するものの、その地理的位置

の故に東南アジアの仏教文化に接することが容易である。その結果、バングラデシュ仏教は多彩な習合的文化を抱え込んでいる。したがって、宗教的不寛容が深刻な問題を惹起している世界の他の宗教的諸伝統への教訓ともなり得よう。更に、バングラデシュのオラオン仏教徒コミュニティの社会宗教的民間文化（民間儀礼および祭祀）に関する詳細かつ包括的な研究を通じて、イスラームが支配的な国において少数派宗教コミュニティが固有のアイデンティティを保つのに社会宗教的民間文化がいかなる役割を果たしうるかを理解する助けとなるであろう。

5. 研究の視野 (Scope of the Research)

その重要性にもかかわらず、バングラデシュ国内のオラオン族に関する体系的で学術的な先行研究は存在しない。バングラデシュ国内外の研究者がこれまでオラオンに注目してこなかった理由は幾つかある。まず、バングラデシュの仏教徒が様々な少数民族集団からなる小規模なコミュニティであるということが挙げられる。大規模な仏教コミュニティをもつ諸国に比してバングラデシュで得られる資料および原典は乏しいのである。第二に、オラオンがバングラデシュ国内の辺鄙で未開発な地域に居住する少数民族集団であるということがある。第三に、少数コミュニティの文化という主題そのものが、研究者にとってあまり関心を引かないのである。したがって、本研究は、潜在的な重要性をもったこのテーマに関する知識のギャップを埋めることを目指している。

6. 研究の方法論 (Research Methodology)

本研究は主としてオラオン部族コミュニティの人々、彼らの行動様式、そしてバングラデシュ社会を扱う。したがって、社会科学的研究手法、特に内容分析と記述的方法が採用されている。内容分析の手法は、書物、論文、聞き取り、討論、史資料などの内部にある諸概念を確定するために用いられる。一方、記述的方法は、データ収集に際して観察が主要な手段となる場合に適しており、また、状況や出来事を記述するためにも用いられるものであって、以下のような特定の目的を有する—

- a) 現存の諸事象を記述する詳細な事実情報を収集する。
- b) 諸問題を比定し或いは目下の諸条件および諸慣行を正当化する。
- c) 比較し評価する。
- d) 類似した問題や状況に他者がどう対処するかを確定し、将来の計画や決定をなす際に彼らの経験から利益を得る。

本論文は主としてフィールドワークと文献調査にもとづいているため、内容分析と記述的方法が最も適切な分析方法となる。本研究の第一段階は、バングラデシュのオラオン族の社会宗教的生活における歴史的変化について、綿密で包括的な調査を遂行することである。この包括的調査は、オラオン族コミュニティにおける仏教的な諸活動の始まり、および彼らが仏教的信仰と文化を受容していったプロセスを探索するために必要である。次に、広範な民族学的フィールドワークにもとづき、オラオン族の現在の諸慣行を検討し、彼らの社会宗教的民間文化を探求する。これは、多文化で多宗教な国における固有のコミュニ

ティとしての彼らのアイデンティティを探るのに必要である。更に、オラオン族コミュニティの様々な学識者、宗教指導者および一般人に聞き取りを行い、彼らが自らの信仰と文化をいかに表現し理解しているかを追究する。

7. 研究の資料 (Sources of the Research)

文献資料とフィールドワークを併用する。文献資料としては、パリー語伝典、旅行記、考古学的記録および発掘資料、そしてバングラデシュ国内外で出版された書籍、雑誌、定期刊行物といった権威ある二次資料である。フィールドワークにあたっては、筆者はオラオンの人々の家庭に滞在して彼らの生活様式を子細に観察し、また多くの社会宗教的民間儀礼、祭礼、式典に参加することを許されている。オラオン族の生活に関するこうした直接的観察は本研究の強みの一つであり、本論文で力点の置かれたところである。更に、種々の社会的立場にある人々に聞き取りを行い、彼らの意見や理解も本論の重要なデータとして取り扱われている。

8. 本論文の目次 (Content of the Thesis) 略 (上記「II. 目次」に同じ)

9. 本論文の構成原理 (Rationale for the Structure of the Thesis)

本論文は序論、7章に分かれた本論、および総結からなる。序論では本論文の目的、視野、方法論、論文全体の概要、そしてバングラデシュおよび同国仏教コミュニティの略史を述べる。第I章では「オラオン」という用語、その起源および意味を説明し、オラオン族の人類学的帰属、氏族、言語、社会構成、生活、そして歴史的素描を記す。オラオンの文化へのこうした導入は、彼らの生活の主要行事に関わる諸慣行を順次に記述する以後の諸章を展開するのに不可欠である。オラオンは誕生と結婚と死を人間生活の重要な出来事と見なしている。民族的アイデンティティはこうした出来事に関わる儀礼や祭祀によって保たれている。また、こうした儀礼祭祀はコミュニティの安全と繁栄を確保するものでもある。したがって、第II章、第III章、第IV章において、それぞれ誕生と結婚と死に関わるオラオンの様々な祭祀を扱う。次いで社会的アイデンティティに焦点をあて、第V章において社会的な儀礼、祭祀、祭礼、および式典を考察する。種々の民間慣行は民族的アイデンティティと帰属の源であり、コミュニティがその固有性を保つ助けとなるものである。このため、続く第VI章ではそうした民間慣行が焦点となる。民族的コミュニティにとっては、文化的アイデンティティとともに宗教的アイデンティティも重要である。それ故に、オラオンの宗教的祭祀、祭礼、式典、および宗教文化的アイデンティティが第VII章の主題となる。最後に、総結において本研究で得られた諸々の知見を統合する。更に、補遺として、バングラデシュ国内にあるオラオン族の仏教寺院に関する情報を網羅した寺院総覧を加える。末尾には本研究の諸資料を示す文献目録を付記する。

10. 本論文の要約 (Summary of the Thesis)

第I章はバングラデシュのオラオン族の歴史と現状を概観する。人類学的言語学的には

オラオン族はドラヴィダ系であり父系制社会を構成している。オラオンはバングラデシュに元々居住していたと主張しているが、本来の故地はガンジス河東南のカルシュ、現インド・ビハール州西部のシャハバード地方であろうと推測される。彼らはインド各地、特にオリッサ、チョータ・ナグプール、ランチ、ビハールおよびラージマハル山岳地帯からバングラデシュに移住した。ムガル時代（1526-1707）に移動を開始し、イギリス統治時代（1757-1947）の初期に最も多く来住した。バングラデシュ国内では北部に多く居住している。最近の法令 *Khudra Nri-gosthi Sanskritik Pratisthan Ain 2010* (The Small Ethnic Groups Cultural Institution Act 2010 少数民族文化庁令 2010 年) では、*Khudra-Nrigosthi* (少数民族) に認定されている。また、ウパジャティ (*Upajati* 部族民) とかアーディヴァーシ (*Adivasi* 先住民) といった名称で分類されたこともある。

オラオンは独自の言語、民間信仰もしくは伝統、社会規範および慣習を有している。しかしながら今日では三つの宗教の何れかに属している。ヒンドゥー信者は下層カーストのヒンドゥーと見なされている。他はキリスト教と仏教である。バングラデシュにおける 1991 年の国勢調査では、彼らは下層カーストのヒンドゥーに数えられている。また同調査によれば国内のオラオン人口は 11,296 人である。しかし 1997 年にオラオン青少年財団プログラム (*Oraon Youth Foundation Program*) が刊行したオラオン社会調査報告によれば、総数 85,041 人となっている。同報告は、隣接するインドの諸地域に居住する人々を含めればオラオン部族の人口は 1,133,000 人の多数にのぼるとも述べている。更に、2014 年にバングラデシュ・オラオン学生連盟のメンバーに聞き取りをした際には、約 10 万人という情報を得た。バングラデシュ政府公刊百科辞書『バングラペディア』 (*Banglapedia*, 2012) は 102,000 人という数字を示している。

バングラデシュ国内のオラオン人口に関する各種の人口調査結果を図示すれば以下のようである：

Sources	Population
Bangladesh Population Census 1991	11,296
A survey report of the Oraon community published by the Oraon Youth Foundation Program in 1997	85,041
<i>Banglapedia</i> , a national encyclopedia of Bangladesh	102,000

オラオンの仏教への改宗は 1994 年に始まったが、依然として、部族が古くから伝承してきたダルメーシュ (*Dharmesh*) なる創造神へのあらゆる信仰を維持しており、この信仰によって他の仏教徒集団との差異を保っている。

オラオンたちは誕生と結婚と死を人間の生の重要な節目と見なし、そうした折々に安全と繁栄を願い、また清浄性を再生させるため、多くの社会宗教的儀礼祭祀を義務として行

っている。

第Ⅱ章は彼らの誕生に関する観念と祭祀を論じる。バングラデシュでも特に都市部に於いては近代的な医療設備が整っているが、オラオンたちは伝統的なやり方で各自の家で出産する方を選ぶ。これは伝統に従っているというよりは寧ろ貧困の故であろうと推測される。出産は複雑な事柄であるから、妊娠期から出産に至るまでの間に様々な決まり事が定められている。健康上のリスクは当然高いから、安産を祈願し清浄性を保つための儀礼を遵守している。基本的に諸儀礼は一家の安全と繁栄のためであり、それを通して危険への注意が喚起される。仏教改宗以後も誕生に関わるそうした伝統的な慣習や俗信を捨てていない。

第Ⅲ章は婚姻に関する種々の儀礼祭祀を検討し、それらの慣習について彼らが抱いている観念や意識に着目する。結婚式においては民間的な祭祀と宗教的な祭祀の両方が重要な役割を果たしていることが明らかである。仏教に改宗したオラオンたちは、仏教僧侶が参加しなければ結婚が不完全なものになると考えてはいるが、俗信に由来する儀礼も引き続き主要な位置を占めている。更に、婚姻を一種の秘蹟と見なし、同族結婚の慣習によってオラオンの社会的固有性を保っている。

第Ⅳ章は葬礼を扱う。ベンガル仏教徒がオラオン社会に仏教を布教したことで、その仏教的慣習がオラオンに特に大きな影響を与えたのが葬送儀礼である。オラオンたちはバルア族の仏教徒コミュニティと基本的には同一の葬礼を遵守しているのであるが、民間社会儀礼的な側面においては相違も見られる。例えば、子供たちの恐怖を取り除くための儀礼や、「(死者の)影の入室」といった特異な儀礼は、オラオン仏教徒にのみ見られるものである。仏教を受容した後も彼らはこうした伝統的な慣習と信仰に従っており、それによって他の仏教徒コミュニティとの社会的差異を保持している。

第Ⅴ章ではオラオンの社会的な儀礼と祭礼を検討する。それにより明らかにされるのは、種々の宗教に改宗したにもかかわらず、長きに亘りオラオンが伝統的な社会的宗教的祭礼を執行し続けているということである。新たな宗教を採用したことは、こうした古来の慣習の遵守にさほど影響を及ぼさなかったようである。オラオンは祭礼や儀式を執行する際には新たな宗教の規則や義務を厳密に顧慮することをしない。伝統的祭礼儀式を途切れることなく実践することにより、彼らは宇宙を構成する諸要素—神、精霊、自然、そして人間—の間の調和ある関係性を確立するのである。彼らの行為は全面的に共同体志向である。殆どの伝統的祭礼は季節的なもので、農作業と密接に関係している。彼らは農民であるから生計は全く自然に依存しており、従って常に過酷な労働に従事し洪水や旱魃、饑饉、病気、疫病といった自然災害や困難に立ち向かわなければならない。オラオンが自然の災禍を緩和しようとする方法の一つがこうした伝統的祭祀に頼ることである。辛い田植作業の後や厳しい刈り入れ仕事の前、田畑の作物の生育を促進するために陽気な祭礼や式典に没頭するのである。それ故、オラオンの社会宗教的諸儀礼は肥沃多産祈願の祭礼と見なし得るものであり、豊穰信仰に起源すると結論づけられよう。更に、こうした祭礼の執行によってオラオンは身体的・心的エネルギーを復活させる機会を得る。また、やはり独立したコミュニティとしての明確なアイデンティティをも保つのである。

第VI章ではオラオンの人々が大いに好む祭礼であるラージ・カーラーム祭の諸相を分析する。カーラームはこの部族が最も崇拜する聖樹で、生命、その永遠性、成長、繁栄、生殖と再生、の象徴であり、いわゆる宇宙樹 (*axis mundi*) に相当する。年間を通じて5種類のカーラーム祭が祝われるが、その最も盛大で主要なものがベンガル暦バドラ月 (9~10月) の満月の夜に催されるラージ・カーラーム祭である。このオラオンの祝祭は一連の宗教的儀礼を遵守実行することとか、あるいは楽しみを共にするといったことに止まらない、ずっと重大な事柄を反映している。カーラーム祭はオラオンの生活様式およびその複雑な信仰と慣習、教義と実践、を顕わに示してくれる。今日ではオラオンの種々の祭礼は他のコミュニティのそれらと異なりオラオンの人々がその特異な部族的アイデンティティを維持することに役立っている。また、種々の儀礼、行列、それらに伴う地産の美食や自家醸造酒、歌謡、舞踊と音楽は、親類縁者や友人が改めて絆を深める多数の機会を提供している。多くの場合、祭礼は播種、収穫、脱穀、貯蔵等々の季節毎の農作業と密接に結びついている。ラージ・カーラーム祭は天候の順調、豊作、狩猟の成功、家畜の健康、結婚や出産といった社会的慣行の実践、そしてコミュニティ全般の繁栄と多産を確保することを目指す、異教的豊穰信仰に由来するものであると結論出来よう。

第VII章はオラオンの宗教的実践の多様な諸相を分析する。基本的には、バングラデシュの全ての仏教徒コミュニティは上座仏教の信者として同一の宗教儀礼や祭礼、式典を遵守する。殆どの宗教儀礼は仏陀の生涯と深いつながりがある。結果的に、これらの儀礼は在家信者を鼓舞するのに大きな役割を果たしている。また、サンガ (出家僧団) と在家信者との間に相互理解および親愛の橋渡しをする助けとなっている。オラオン仏教徒への聞き取りの結果では、大多数が涅槃と此岸的な利益の両方の獲得を願って日常儀礼を行っているが、涅槃の達成よりは現世及び来世の利益の方を強調していた。涅槃の達成のみに意を向ける基本的仏教教義とは対照的であるが、この点ではバングラデシュのどの仏教コミュニティの信仰の実態も同様である。

補遺ではバングラデシュにおけるオラオン仏教寺院の存在様態に関する情報が提示される。2013年7月25日から8月3日にかけて、オラオン族居住地域で広汎なフィールドワークを行って得られた成果の一つである。以下に、オラオン居住地域の仏教寺院数を県別に示す：

District Name	Monastery Number
Dinajpur	3
Joypurhat	4
Naogaon	3
Rangpur	9
Thakurgaon	1
Total	20

なお、これらのデータは、バングラデシュの他地域に散在する多数の仏教寺院に関する

情報を併せて、ダッカ大学および龍谷大学教員の協力の下に精査・編集され、2014年度末に龍谷大学アジア仏教文化研究センター（BARC）の刊行物として出版されている。

Directory of Buddhist Monasteries in Bangladesh (A Provisional Edition), co-edited by Dilip Kumar Barua, Shantu Barua, Yusho Wakahara, Kensuke Okamoto, Ryukoku University Research Center for Buddhist Culture in Asia (BARC), 14 February 2015, 163 pages.

1 1. 付言 (Remarks)

本論文には、筆者がこれまでに日本の各種学術雑誌に掲載した論文や、学会等で行った口頭発表の内容の殆どが組み入れられている。以下にそれら先行業績の一覧を掲げる。

- a) 第II章：“Notions and Ritual Concerning Birth among the Oraon Community in North Bangladesh: A Case Study”，龍谷大学佛教学研究室年報第18号、2014年3月 pp.39-50。
- b) 第III章：“A Case Study of the Marriage Ritual in an Oraon Buddhist Community in Bangladesh”龍谷大学大学院文学研究科紀要第36集、2014年12月 pp.1-26。
- c) 第IV章：“Funeral Rites of Oraon Buddhist Community in Bangladesh: A Case Study”パーリ学仏教文化学会第29回学術大会 於四天王寺大学 2015年5月30日。論文は同学会機関誌『パーリ学仏教文化』第29号に掲載予定（受理済）。
- d) 第V章：“Fagua Festival: A Socio-Popular Festival of the Oraon Buddhist community of Bangladesh”龍谷大学佛教学会学術大会 於龍谷大学 2015年1月28日。日本印度学仏教学会第66回学術大会 於高野山大学 2015年9月19・20日。論文は同学会機関誌『印度学佛教学研究』第66号に掲載予定（受理済）。
- e) 第VI章：“「ラージ・カーラム・パラボー・バングラデシュのオラオン部族仏教コミュニティの民間祭儀—」、『東方』（中村元東方研究所紀要）第30号、2015年3月 pp.159-176。

本論文がバングラデシュの仏教および仏教徒、とりわけオラオン族に関する理解と知識の増進に寄与することを念願するものである。

IV. 審査委員会の評価

本論文は、バングラデシュの少数民族オラオンに関して、先行研究が乏しい中、文献資料を丁寧かつ批判的に読み解くとともに、綿密な現地調査による聞き取りとデータ収集をおこない、誕生から葬送に至る各種の通過儀礼、祭礼、そして仏教儀礼について詳細かつ客観的な民俗誌的叙述に成功している。通過儀礼の箇所は先行研究をはるかに凌駕する詳細な叙述をおこない、かつ適切な分析を加えている。仏教改宗後に導入された仏教儀礼についても、自らが同国で伝統的に仏教を奉じてきた少数民族の一つであるバルア族に属するという利点を活かし、多くのページを割いて詳しく論じ、それら儀礼の典拠となる文献（パーリ語仏教聖典）にも言及しつつ報告し分析を加えている。本論文において、オラオンの民が現在おこなっている各種の宗教的社会的儀礼の次第や特徴が初めて明らかにされたといっても過言ではない。その意味でも本研究がバングラデシュの少数民族の文化社会研究に貴重な貢献をしたことは疑いない。

オラオン族のコミュニティにおいて、現在進行しつつある改宗仏教徒運動をテーマにした、他に類のない研究であり、詳細な現地調査に基づき、これまで知られていなかったネオブディスト（改宗仏教徒）の存在を世に知らしめたという点でも大きな成果である。従来の仏教学の研究は、文献学的歴史学的なアプローチが主流であるが、本論文のように現在進行形の改宗運動について、文化人類学の方法論を用いたものはこれまであまり行われてこなかった。しかし、本論文は、部族コミュニティの置かれている文化的・社会的コンテクストのなかで、新たな宗教運動として仏教徒のコミュニティが形成されていく過程を記述し分析するという方法が、仏教学の研究分野においても可能であるということを証している。その意味で既存の学問分野に新たな領野を切り拓いたといえる成果であり、この点も併せて評価すべきであろう。

こうした学術的かつ包括的な現地調査は、南部の首都ダッカを中心として発展した同国の辺境にあたる、ウッタール・バングラ（Uttar Bangla）と総称されるバングラデシュ北部地方で嘗て行われたことのないものであり、それ自体でオリジナルな価値を有している。フィールドワークの実施にあたっては、同地域オラオン族出身の知識階級である知人を介して、数次の周到な事前予備調査を経て具体的対象となるフィールドを選定している。そして、文明の恩恵に浴さない辺鄙な地域にある当該部族の村落に一定期間居住して生活を共にしつつ、種々の儀礼や行事への参加を許され、オラオン社会に受け入れられた上で、様々な階層・年齢・性別のインフォーマントへの周到な聞き取りを行っている。バングラデシュの主要な公用語であるベンガル語を母語とし、小数部族の言語にも通じた著者によって初めてなされた調査研究であるといえよう。

元来、文字に記された文献伝承を持たない部族社会にあっては、無形の口承伝承にこそ根源的な重要性が付与されている。本論文の「ラージ・カーラム祭」の記述が活写しているように、部族社会の共通の記憶と歴史は祭礼の場において神話や寓話の形で反復して語られ続け、その度毎に共同体の絆とアイデンティティを強化し再生させるという枢要な役割を帯びている。しかしながら、そうした口承の伝統が近代化とグローバル化の過程で遠からず風化し見失われていくであろうことはバングラデシュにおいても危惧されているところであり、この意味においても本研究は貴重なものである。

他方で、本研究が新たな領域を開拓しようとする意欲的な試みであるが故の幾つかの課題も、バルア氏が今後更なる研究の展開を図られる際の方向性を示唆するものとして、委員から提示されている。

本論文が基礎研究、事例研究として貴重なものであることは疑いを容れないが、オラオン部族のみに特化した研究であるための限界も感じられる。この面では、バングラデシュ或いは広くインドなど南アジアの同種の事例との比較が有効となろう。その際、オラオン族についてはインド側の研究者との協力によって、また本論文では直接扱われていないバルア、チャクマ、マルマなど主としてバングラデシュ東南部に居住する他の仏教徒少数諸部族コミュニティ、および彼らとイスラーム社会との共存／対立関係などについては、隣接するミャンマー側の研究者との連携によって、今後更に包括的で有意義な研究の展開が見込めるであろう。

本論文中に記述されている各種儀礼を通観してみると、更に追究さるべき興味深いトピックが種々提起され得るが、まさにそれらの点こそ、本研究を手がけたバルア氏に今後継続して研究を深めていくことを期待したいものである。先ず、オラオン独特の信仰ともいわれるダルメーシュ (*Dharmesh*) 神が注目される。明らかにサンスクリット語の名をもち、かなり一神教的で抽象的存在とも思われるこの神格は、どこからどのように由来してきたのか。本論文中に散見される叙述から、ダルメーシュ神は祖先崇拜と並列されているようだが、オラオンの民は、両者をどう位置づけ関係づけているのだろうか。この神は偶像も絵像もないとのことであるが、ある意味で変幻自在な万能神なのか。本論文を読めば読むほど興味深い存在に思われるので、ぜひとも、インド側に居住するオラオン族の研究も視野に入れるなどして、更なる解明を求めたい。

次に、仏教への改宗について。本研究によれば、1994年にオラオンの民が進んで仏教に改宗し、それをバルア仏教徒が支援したという。わずか20年ほど前の出来事であるので、この改宗がどのような政治的社会的コンテクストの下で進められたのか、客観的な情報が更に入手可能であると思われる。当時の報道や公式文書、そして改宗に関わった主導者とその周辺の人々への取材などをもとに、改宗自体がどのような状況の中でどのようなプロセスでおこなわれたか、これだけでも独立した研究になりうるだろう。

また、オラオンの人々が、イスラームを国教とするバングラデシュにおいて、人口的に多数派であるムスリムとなる道を選択せず、同じ少数派の中でも、キリスト教・ヒンドゥー教を選択することなく、仏教徒となる道をとった理由については必ずしも十分な検討がなされているとは言いがたく、さらなる調査と考察の必要性が感じられる。

次に、仏教改宗後の20年ほどの間にオラオンの新仏教徒らが関わる通過儀礼や祭礼などはどのように変容してきたのか。おそらく上座仏教の僧侶らは「迷信的」で「異教的」な伝統的習俗を廃し、純粹に上座仏教的な方向へと導こうとしてきていることは想像に難くない。一方で、公開口頭試問の際にバルア氏が回答されたところによれば、オラオンの民の中でも教養のある人たちがこそが、動物供犠を自分たちの伝統文化だとして、仏教僧側と一種の文化摩擦を起こしているというのが現実である。上座仏教研究の碩学、故前田恵學博士は嘗て「仏教の存在形態」という表現をもって、それぞれの時代それぞれの地域で、多種多様にローカルな風土や文化と接触、融合して仏教が人々のあいだに生きてきた事実を見据える重要性を我々に示されたが、バルア氏にも今後は是非こうした視点を大事にしていきたい。バルア氏自身が敬虔な仏教徒である故か、「オラオンは依然として伝統的習俗に従っており、迷信その他におびやかされている」というような趣旨の記述が本論中にいくつかみられる (pp. 98-99; 126; 191) のが少し気になるところである。純粹で混じり気のない仏教やその儀礼というものが曾てあった、あるいはそうあるべきである、という視点にとらわれることなく、混濁的かつ重層的な、あるいは相互にせめぎ合うような宗教文化の様相を丁寧に分析、解釈するのが研究者の役目であろう。オラオン仏教徒のさまざまな儀礼が今後どのように変化していくのかは宗教学や社会学など異分野の視点からも大いに興味深いので、中庸の視点からその動向を観察、分析して欲しい。

さらに細かいことをあげつらえば、各種儀礼の記述に見られる二項対立 (男女、左右な

ど)の意味するところ、あるいは、特定の数(3回、7回など)の意味合いについては、一部を除いてあまり解釈や説明がほどこされていないように見受けられた。宗教職能者側の教えと一般人の理解の双方からの聞き取りにより、あるいは、ヒンドゥー教や仏教由来であるとすればその典拠となる文献資料の読解などにより、これらの事象の儀礼における象徴的な意味をさらに明らかにしていただけるとありがたい。

本論文は、学術論文としての記述の客観性を担保するために止むを得ないであろうが、部族コミュニティの宗教活動についての文化人類学的なデータの収集、記述、そしてその分析が論述の主となっており、実際のコミュニティのメンバーの生の声あまり伝わってこないところが惜まれる。この点については、今後、宗教社会学の方法論を取り入れて、聞き取り調査をふくめて信仰の内容についての分析を含むものに展開して行かれることを望みたい。また宗教学的な視点からは、コミュニティのレベルでの改宗として取り扱うだけでなく、コミュニティに属する個人のレベルで改宗のプロセスを通してどのような宗教的意識の変化があったのか(またはなかったのか)についても、研究の対象として取り扱われることが望まれる。

最後に、バルア氏が、個別の部族に関する文化人類学的な考察にとどまらず、本研究の成果を土台にして、今後は、より幅広く国や文化の枠組みを超えて、比較思想論や比較宗教文化史(例えば日本の神仏習合思潮との比較研究)などの分野にも貢献されるような研究の展開に挑まれ、更に優れた成果を挙げられることを大いに期待したい。

以上、審査の結果、本審査委員会は、シャントウ・バルア氏が龍谷大学学位規程第3条第3項に基づき、博士(文学)の学位を授与される十分な資格を有するものと認めるものである。

2016(平成28)年1月20日

主 査：若原 雄昭
副 査：岡本 健資
副 査：那須 英勝
副 査：安藤 充